

# コメニウスの『第一哲学』

## ——考察と試訳1——

相馬 伸一\*

(受付 2022年9月13日)

### はじめに

本稿は、17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス (Johannes Amos Comenius, チェコ語表記では Jan Ámos Komenský, 1592–1670) の形而上学的著作『第一哲学』 (*Prima philosophia*, 1630.) の成立過程, 書誌, 概要, 彼の思想における位置, 哲学思想史上の意義について考察するとともに, 日本語の試訳と註解を提示するものである。本著作は, 序文, 4部及び補遺からなるが, 本稿では第2部までの試訳を示す。

#### 『第一哲学』の成立時期とコメニウスの状況

本著作は, 1630年頃にポーランドのレシュノで著されたと考えられている。当時のコメニウスがおかれた状況について触れておく。

1620年のビーラー・ホラ (白山) の戦いを勝利し, 三十年戦争を優位に進めていた神聖ローマ皇帝フェルディナント2世 (Ferdinand II., 1578–1637) は, 1627年および1628年, 改訂領邦条例を発布した。これは, ボヘミアとモラヴィア (ほぼ現在のチェコ共和国の範囲にあたる) において, それまで維持されていた信仰の自由を否定し, ローマ・カトリックのみを公認宗教とするもので, プロテスタント系市民は改宗するか亡命するかを迫られることになった。チェコ宗教改革の伝統を継承するチェコ兄弟教団の牧師として積極的に活動していたコメニウスは, チェコ地域内で潜伏生活をする一方, ドイツ地域への修学経験も買われ, 教団の移住先を求めてポーランドやドイツ東部を訪れていた。教団の首脳らは, それ以前から信徒を受け入れていたポーランドのレシュノに向かうことになり, コメニウスを含む一行は, 現在のチェコ共和国フラデツ・クラロヴェー州北部のジャツレージュに一泊した後, 1628年2月4日にポーランドに入り, 8日にレシュノに到着した。

ポーランドのレシュノは, 現在はヴィエルコポロスコ県に属し, 人口は6万人程度と目立たない都市だが, 当時は, 神聖ローマ帝国伯爵位にあり, なおかつカルヴァン派に改宗して

---

\* 佛教大学教育学部 教授, 広島修道大学人文学部 非常勤講師

いたレシュチニスキ家の所領であった。レシュチニスキ家は、16世紀からチェコ兄弟教団を受け入れ、街は印刷業などで発展した。ラファウ・レシチニスキ (Rafał Leszczyński, 1579–1636) は、カルヴァン主義の擁護者であるとともに、諸学に精通し一時はガリレオ・ガリレイの下で学んだという経歴もあり、コメニウスを支援し、息子のボグスワフ (Bogusław Leszczyński, 1612–1659) の教育にもあたさせた<sup>1</sup>。

レシュノに入ったコメニウスは、間もないうちに当地のギムナジウムの教師となった。すでに教育研究を志していた彼は、ここで教授学の研究と教科書編纂を進めた。当時、亡命者たちの間で幼児教育の手引きが求められており、最初の妻を失い、再婚した後、2人の娘が生まれていた彼は、2人の幼児を実際に観察しつつ手引書を著した。これが、独立した幼児教育論としては最初期のもつとされる『母親学校の指針』(*Informatorium školy mateřské*) であり、概略は1630年には仕上がり、1633年にはレシュノでそのドイツ語訳が出版された。1631年には、『開かれた言語の扉』(*Janua linguarum reserata*) が出版され、彼は言語教育の改革者として脚光を浴びることになった。そして、翌年には『教授学』(*Didactica*) が完成している。これはチェコ語で書かれたもので、加筆のうえラテン語に翻訳されて、『教授学著作全集』(*Opera didactica omnia*, 1657–1658) 第1巻に収められたのが『大教授学』(*Didactica magna*) である。レシュノで著された『教授学』は彼の生前には出版されず、1841年になってレシュノで原稿が再発見され、1849年に初めて出版された。

なお、この時期には、その他にもさまざまな教科書が著されている。それらとしては、『理論的幾何学』(*Geometria theoretica*, 1628–1630. 生前には未公刊)、『世俗あるいは政治の歴史』(*Historia profana sive politica*, 1631. 生前には未公刊)、『宇宙論の概要』(*Cosmographiae compendium*, 1631. 生前には未公刊)、『開かれた言語の扉』よりも簡便な教科書をという声に応じて編纂された『開かれた言語の扉の前庭』(*Januae linguarum reseratae Vestibulum*, 1632)、『神の光に向けて改革された自然学の綱要』(*Physicae ad lumen divinum reformandae synopsis*, Leipzig, 1633.) 等がある。『自然学綱要』は、コメニウスの自然哲学を知るうえで重要な書であり、後年、長い補遺を付して再刊され、生前に英語版も出た。本稿でとりあげる『第一哲学』は、この時期に著された教科書および教材のひとつである。

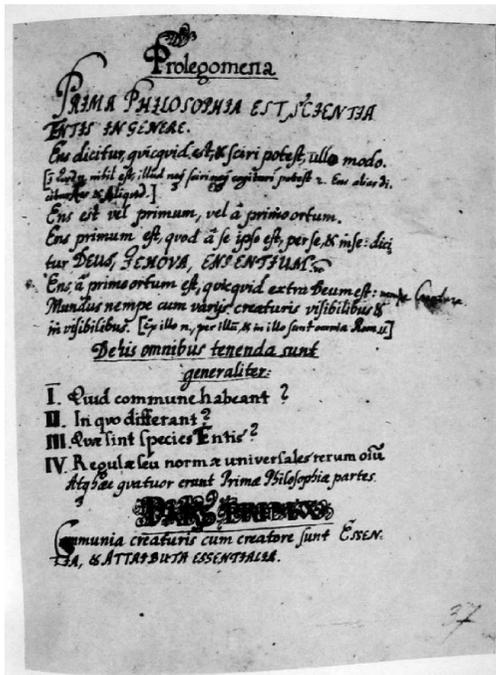
これらの著作からは、レシュノに移ったコメニウスが、ギムナジウム教師として、ラテン語の学習にとどまらず、形而上学、幾何学、天文学、地理学、歴史にわたる教育内容を、自身の哲学的観点から再構成するのを試みていたのを知ることができる。彼は、当時の自然科学の発見に強い関心をもっていた一方、天動説の擁護者であった。ゆえに、これらの著作に

1 ボグスワフ自身はのちにカトリックに改宗するが、プロテスタントの保護は続け、孫のスタニスワフ1世レシチニスキ (Stanisław I Leszczyński, 1677–1766) はポーランド・リトアニア国王に就き、退位後にロレーヌ公となった彼は思想家のルソーと論争したことで知られる。

見られる主張は、現在の科学的常識から否定されている内容も少なくない。また、教科書として著されたこともあってか、概説にとどまり、理論的な彫琢は不十分ともいえる。しかし、彼は、いかなる知識もそれが広く普及できるように表現されなければ、その意義は限定的なものにとどまると見ていた。そして、むしろ逆に、教科書を意識して書かれたために、彼の主張が簡潔に示され、それらをどのように伝えるのかという教授学的配慮が読みとられるという点で、これらの著作には独自の意義が認められる。

### 『第一哲学』の書誌をめぐって

この著作は、コメニウスの生前には出版されなかった。レシュノは、コメニウスが1628年2月から1641年8月、1648年8月から1650年3月、1654年7月から1656年4月にかけての3期にわたって、合計で約17年居住した街である。1655年、ポーランドでは「大洪水時代」と呼ばれる戦乱が起き、スウェーデンがポーランドに侵攻し、その後も、ポーランド地域ではウクライナ・コサックやロシアとの戦いが続いた。この渦中の1656年3月、スウェーデン軍の支配下にあったレシュノはポーランド側の攻撃を受け、街は3日にわたる火災に見舞われた。コメニウスは、この街に自邸を購入していたが、家財や蔵書、草稿の多くを残して避難せざるを得なくなった。この火災でレシュノの繁栄は終わり、コメニウスも多くの草稿を焼失した。



『第一哲学』草稿の表紙

19世紀になり、チェコ地域における民族再生運動のなかでコメニウスの再評価が本格化すると、彼の遺稿についての調査も始まり、レシュノでは先述の『教授学』の草稿等が発見された。その後も遺稿の発見は断続的に続いたが、『第一哲学』の草稿が見つかったのは、レシュノではなくロシアのサンクトペテルブルク（旧ソ連時代はレニングラードと呼称）だった。1897年から1931年にかけて、同市のサルトウイコフ＝シチェドリン記念公共図書館のいわゆるレニングラード・コレクションから発見されたのである。発見者は、チェコの文献学者ヴァーツラフ・フライシュハンス（Václav Flajšhans, 1866–1950）であった。このコレクションには、コメニウスの著作として、『第一哲学』、上記の『理論的幾何学』、『字

宙論の概要』、『世俗あるいは政治の歴史』のほか、チェコ語で記された『八つの天空の導きの星々の出現と消滅』(*O vycházení a zapadání přednějších hvězd oblohy osmé*)と『チェコ語の詩について』(*O poezi české*)の5点が含まれていた。『八つの天空の導きの星々の出現と消滅』は、天空を24の領域に分割し、それぞれの領域がどの時期のどの方角に見えるかを記したもので、これもおそらくは子どもの教育用に書かれたと考えられる。『チェコ語の詩について』は、コメニウスがまだモラヴァのフルネックにいた1621年に書かれた詩についての理論的考察で、チェコ語はギリシア語やラテン語に次いで韻律の整った詩作に適した言語であると論じられている。

こうした草稿類がなぜサンクトペテルブルクで見つかったかは、サルトウイコフ＝シCHEDリン記念公共図書館の歴史が関係しているだろう。この図書館は、現在は、ロシア国立図書館(サンクトペテルブルク)と称される同国最大規模の図書館だが、その蔵書の淵源は、ポーランド＝リトアニア共和国のザウスキ図書館にある。ザウスキ図書館は、ポーランド最初の公共図書館としてワルシャワに設けられたが、1794年のコシチュシユコの蜂起に対してロシア軍が派遣されたのち、その蔵書はロシアに持ち去られ、1795年、ロシア皇帝エカチェリーナ2世アレクセーエヴナ(Екатерина II Алексеевна, Yekaterina II Alekseyevna, 1729-1796)は、それらの蔵書をもとに帝国公共図書館を開いた。この際、啓蒙主義の大思想家のヴォルテルやデイドロの蔵書も買い取られて収められたという。同図書館は、1814年に公式に開館し、社会主義時代はサルトウイコフ＝シCHEDリン記念公共図書館と称された。この間、一部の蔵書はポーランドに返却された。とくに、1920年のポーランド・ソビエト戦争のリガ平和条約後、旧ソ連政府は5万点に及ぶ資料をポーランド側に返却した。コメニウスの草稿は、返却されたなかには含まれていなかったのであろう。その後、第二次世界大戦末期、ワルシャワ蜂起の失敗後、ナチス・ドイツはザウスキ図書館の資料の多くを破壊した。コメニウスの資料は、旧ソ連がポーランドに返却しなかったために、破壊を免れたといえるかもしれない。

この草稿には署名がなく、コメニウスの著作であるか否かについては、コメニウス研究者間でも議論があった。コメニウス研究者のヨゼフ・ヘンドリヒ(Josef Hendrich, 1888-1950)は、チュービンゲン大学で哲学史を講じていたマックス・ヴント(Max Wundt, 1879-1963)<sup>2</sup>に照会したが、ヴントは、この草稿にはコメニウスが他の著作で用いている形而上学的な諸概念が含まれていること、コメニウス以前およびコメニウス当時の形而上学的著作にはない独自性が認められるとして、これをコメニウスの著作と判定するとともに、その哲学的価値

2 マックス・ヴントの父は、実験心理学の祖として知られるヴィルヘルム・ヴント(Wilhelm Wundt, 1832-1920)である。マックス・ヴントは、ワイマール共和国の成立当初からそれに批判的だった保守的思想家であり、ナチズムの台頭とともに国家社会主義、反ユダヤ主義の立場を鮮明にした。

を評価した。以後、この著作はコメニウスのものと認められるようになり、第二次世界大戦後、哲学者のヤン・パトチカ (Jan Patočka, 1907-1977) は、『アリストテレス——その先駆者と後継者——』 (*Aristotelés, jeho předchůdci a dědicové*, 1964) でコメニウスの『第一哲学』をとりあげ、アリストテレス主義との共通点と相違点について考察した。また、『コメニウスの自然哲学』 (*Die Naturphilosophie des J. A. Comenius, Praha – Hanau, 1970.*) を著したヤロミール・チェルヴェンカ (Jaromír Červenka, 1903-1983) も哲学史的考察を深化させ、コメニウスの主要著作のチェコ語版選集である *Vybrané spisy J. A. Komenského* の第5巻に収められたチェコ語訳を完成させた。

アリストテレスは、存在の本質や起源および構造を探求する学を「第一哲学」と呼んだ。これに対して、「第二哲学」に位置づけられたのが、自然についての学 (自然学) であった。デカルトの主著に『第一哲学についての省察』があるように、この表題は17世紀においても形而上学を表す一般的用語であり、コメニウスは、レシュノにおいて、形而上学と自然学の双方の教科書の作成にとりくんだことになる。この著作の序文には、「第一哲学とは、存在一般についての学である」と記され、その4部門として、I. それらに共通していることは何か?、II. それらは何において異なるのか?、III. 存在の相とは何か?、IV. あらゆる事柄の普遍的な規則または規範があるとされ、これらについての考察がなされる。

本稿では、1969年から当時のチェコスロヴァキア科学アカデミーによる発刊が開始された『コメニウス全集』 (*J. A. Comenii Opera omnia*) の第18巻 (1974年刊) に所収のラテン語テキストを底本とした。

### 主要語の訳語について

形而上学は、他の一般的なテキストにもまして、訳語の検討が重要な分野である。まず、ひとりの思想家の各著作における主要な語の用法をおさえる必要がある。同一の語には、できる限り一貫した訳語を用いないと、混乱を招くことになる。また、その思想家が依拠した過去や同時代の思想家のテキストとの影響を考慮して訳語を決定することも望まれる。しかし、ヨーロッパ圏でも日本でも、研究者によって訳語が異なることが多々ある。また、同じ訳者による翻訳でも、ひとつの語が複数の訳語に訳し分けられることもある。語の意味は文脈によって規定される面があり、このことは一概に批判できない。

次稿で論じるが、コメニウスの形而上学著作はいくつかあり、それら全体をとおした検討にはやや時間を要する。また、アリストテレスの『形而上学』をはじめ、それらのコメニウスへの影響について一定の見通しを立てるためには、先行研究を批判的に検討しなければならない。このため、本稿で提示する日本語訳は暫定的なものにならざるを得ない。

コメニウスの形而上学著作としてとくに重要なのは、彼のユニークな学問体系であるパン

ソフィア（汎知学）の大著『人間に関わる事柄の改善についての総合的熟議』（*De rerum humanarum consultaio catholica*）のとくに第3部の『パンソフィア』（*Pansophia*）、および彼が『開かれた言語の扉』に飽き足らず、事物（事柄、res）それ自体を学ぶことができる書として何度も書き直し、死後の1681年に出版された『開かれた事柄の扉』（*Janua rerum reserata*）である。前者については太田光一による日本語訳（完訳ではない）が出版され、後者については故藤田輝夫による日本語訳（私家版）があるが、両者の訳語にはやはり若干のズレがある。本稿では、形而上学に関連する基本的な語、およびコメニウスに特徴的な語は以下のように訳出した。文脈による訳し分けが必要な場合は注記する。その他、訳の相違が出ないと思われる語は以下の一覧からは除いている。

absentia	欠如	communicationis	伝達	denominatio	呼称
absolutus	絶対的	comparatio	比較	dependentia	依存
abstractus	抽象的	compositus	複合的	depravatio	歪曲化
accidens	偶有性	conatus	努力	Deus	神
actio	能動	conceptus	概念	differentia	相違
agens	行為者	concretus	具体, 個体的	dignitas	尊厳, 位格
amor	愛	congruentia	一致	discipula	弟子
anima	魂	conservatio	保存	discretus	非連続的
annihilatio	消滅	consonantia	協和	dispositio	配置
ars	技術	consuetudo	慣習	duratio	持続
artificialis	人工的	contingens	偶然的	effectum	結果
assimilatio	同化	continua	連続的	efficacia	効果
assuetudo	習慣	contraria	対立	efficacitas	有効性
ataxia	無秩序	cooperor	協働する	efficiens	作用的
attributa	属性	cor	心	elementum	元素
axioma	公理	corpus	身体	ens	存在（者）
beatitudo	至福	correlatum	相関	eruditio	学識
bonitas	善	corruptio	墮落, 衰弱	error	誤り
caligo	暗さ	creator	創造者（主）	essentia	本質
canon	格率	creatura	被造物	exercitatio	練習
causa	原因	crementum	成長	existentia	実在
causatio	因果関係	defectus	欠如	falsum	偽り
commoditas	便利, 便宜	degeneratio	退化	figmentum	虚構

figura	形態	mens	精神	praeteritum	過去
finis	目的, 最後	mensura	尺度, 量	principia	原理
finitus	有限的	meteora	気象現象	privativus	否定的
fixus	固定的	moderatione	適度	pupillus	生徒
fluxus	流動的	modus	様式	qualitas	特質
forma	形相	momentum	瞬間, 勢い	quantitas	数量
futurum	未来	motus	運動	ratio	理性, 根拠
genus	類, 発生, 起源	mundus	世界	realis	現実 (的)
gradus	段階	mutatio	変化	receptio	受容
gratia	善意	natura	自然	reciprocus	交互的
gravitas	重み	necessario	必然的に	regula	規則
humanitas	人間らしさ	nihil	無	relatum	関係
humor	体液	numeros	数	remedium	治療手段
imaginatio	想像	objectum	対象	repassio	反響
impetum	衝動	operatio	活動	requisita	要件
inclinatio	傾向	opifex	制作者	res	事柄
independens	独立的	oppositum	対極	resistentia	抵抗
individuum	個 (体)	ordo	秩序	respectus	各自的
infinitus	無限的	organum	器官	robur	力強さ
ingenium	知能	parentes	親	sapientia	知恵
imperfectus	不完全な	pars	部分	scientia	知, 学
institutio	教育	passio	受動	sensus	感覚
instinctus	誘因, 衝動	patiens	受動者	series	順序
instrumentum	道具, 手段	perfectio	完全性	signum	記号
intellectus	知性	perpetuum	永続	similitudo	類似
intelligo	理解する	pietas	敬虔	simplicitas	単純性
jucunditas	快適さ	proportio	釣り合い	singularis	単一 (的)
lingua	言語	plures	複数の	situs	位置
locus	場所	pondus	重さ	spatium	間隔
magister	師匠	positivus	肯定的	species	種類, 相
malus	悪い	potentia	力	spiritus	霊
materia	質料	praeceptor	教師	subjectus	主体
medium	手段, 中間	praesens	現在	subordinatus	従属的な

substantia	実体	tutor	助教	valetudo	健康
temperatura		unitas	統一	veritas	真理
	気質, 組成, ほどよさ	universalis	普遍的	violentia	暴力
tempus	時間, 時代	unus	唯一, 一者, 一事	virtus	力, 美德
temporarius	刹那的	usus	使用	vitium	欠陥
terminus	境界, 終点	utilitas	活用	voluntas	意志
totum	全体	vacuum	空虚, 隙間		

## 第一哲学の試訳（序文，第一部，第二部）

### 序文

第一哲学とは，存在一般についての学である。

何らかの仕方であり，知ることができるものは，存在と呼ばれる。[1. 無であることについては，知ることも思考することもできないがゆえに。2. 存在は，ときに事柄および何かと呼ばれる。]

存在は第一存在であるか，第一存在から生じたかのいずれである。第一存在とは，それ自体のゆえに，それ自体を通して，そしてそれ自体のうちにあり，それは神，エホバ，存在の存在などと呼ばれる。

第一存在から生じた存在は神の外にあるすべてであり，すなわち被造物である。さらには，可視と不可視のさまざまな被造物とともにある世界である。[というのは，それから，それを通して，そしてそのうちに，あらゆるものがあるからだ（『ローマの信徒への手紙』第11章）]。

これらすべてについて，一般的に知られるべきである。

- I. それらに共通していることは何か？
  - II. それらは何において異なるのか？
  - III. 存在の相とは何か？
  - IV. あらゆる事柄の普遍的な規則または規範
- そして，これらが第一哲学の4部門であろう。

### 第一部

被造物がその創造者と共通して有しているのは，本質と本質の諸属性である。

本質とは、あらゆる存在が何かであり無ではないということによって、あることそれ自体である。

本質の属性とは、統一、真理、善である。

というのは、唯一の神があり、複数の神はいないからであり、こうして神は、唯一の世界を創造し、いかなる被造物も唯一で、それ自体として不可分で、他のすべてから分離されてあることを認めた。

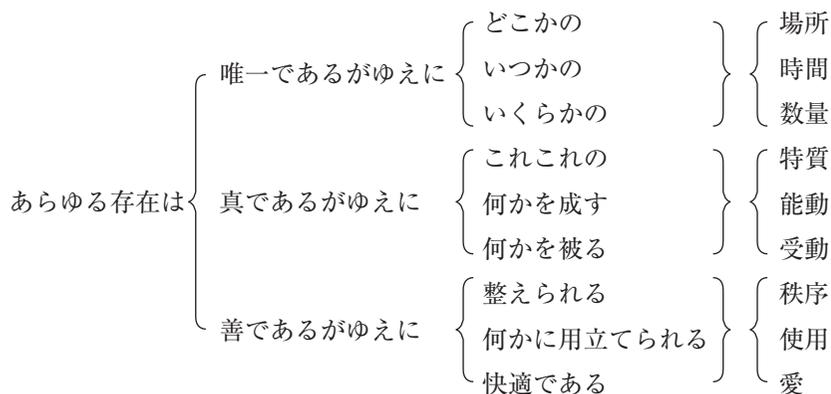
神は真に神であり、架空でも想像でもないがゆえに、かくして神は、世界と創造された事柄に現実的に実在を与え、それぞれひとつのものが真に神の真理のためにあるものとした。

神は自身とあらゆるものにとって善であるがゆえに、かくして神は、世界とあらゆる被造物が自身と他者の使用のためにあることを認めた。[それこそモーセが、「神が創造されたすべては非常に善かった」<sup>3</sup>と、たしかに証していることだ。]

被造物の間には次のことが共通している。

あらゆる被造物の間で一貫しているのは、場所、時間、数量、特質、能動、受動、秩序、使用、愛の9つからなる一次的な偶有性である。

というのは、



場所とは、彼此に応じた存在の受け皿である。

時間とは、前後に応じた存在の持続である。

数量とは、多少に応じた存在の決定である。

特質とは、それがしかじかであると言われる存在の様式である。

能動とは、別の存在に対する存在の効果である。

受動とは、能動の受容である。

3 『創世記』第1章31節。

秩序とは、それらすべてに対応した存在の配置である。

使用とは、何らかの活用に向けて整えられる存在の様式である。

愛とは、その秩序や活用によるがゆえの存在の快適さである。

## 第二部

### 諸存在の相違について

#### I. 被造物と創造主の差異

##### 1. 本質という根拠による相違

1. 神は必然的にあり、被造物は真に偶然的にある。[というのは、神はいないことはできないが、被造物はまさにいないことができるからだ。結局、『ヨハネの黙示録』4章11節にあるように、永遠ということでは被造物は無であったのであり、神の意志による以外には今もないのである。かくして、被造物がないことを神が望むなら、被造物はないだろう。]

2. 神は独立しており、あらゆる被造物は依存している。[というのは、神は、何かのためにでも、どこかからでも、何かによってでも、何かのためにもあるのではなく、自身によって、自身から、自身によって、そして自身のためにあるからだ。あらゆる被造物は、実のところ、他の何かによって、他の何かから、他の何かによって、そして他の何かのためにある。そして、被造物は、ひとつひとつの事柄における、作用、質料、形相、目的という四つの原因で呼ばれる<sup>4</sup>。たとえば、テーブルの作用因は家具職人であり、質料因は木材であり、形相因は正方形や丸や長方形などである。目的因は、食事や他の活動における使用である。]

##### 2. 統一という根拠による相違

1. 神は最も単純な一者であり、あらゆる被造物は複合体である。[というのは、神は他にあり得ず、被造物はまさに多くある。さらに、神は諸部分から合成されていないが、あらゆる被造物は、まさに質料、霊、形相から構成されている<sup>5</sup>。たとえば、植物は元素的な質料からなっており、それ自体としてさまざまな活動のためのある生ける霊<sup>6</sup>を有し、ついには、形

4 アリストテレスの四原因説が引かれている。『自然学綱要』、『パンソフィア事典』(*Lexicon reale pansophicum*)、『必須の一事』(*Unum necessarium*)にも同様の言及がある。

5 第三部「存在の相について」では、実体の原理として、質料、光、霊のトリアーデがあげられている。

6 *spiritus vivus*

相や外的な形態をもつ。]

2. 神は、どこにおいても、あらゆる場所において、そしてあらゆる場所の外にもあるが、被造物はただひとつの場所以外にはない。[それゆえに、神は、束縛されず、遍在していると言われる。]

3. 神には始まりも中間も終わりもなく常にあるが、被造物はその時々にはしかない。[それゆえに、神は永遠的、被造物は刹那的と言われる。]

4. 神は無限であり、その本質に対する境界はないが、あらゆる被造物は有限であり、その大きさ、数、および重さには、明確な限りないしは境界がある。[『列王記上』第8章27節、『知恵の書』第11章21節<sup>7</sup>]

※形相は、形態や形相が生ずる偶有性の組み合わせによるゆえに、神は形相からは構成されない。

### 3. 真理という根拠による相違

1. 神のうちにあるものは何でも本質であるが、被造物の本質はまさに対立する特質の組成から生ずる。[たとえば、木は、厚いと薄い、熱いと冷たい、粗いと滑らかなどの程よさによってある。平静さとは、食物の使用と不使用の程よさである等。]

2. 神は常に自ら能動的な力であり、被造物は行い被る。[『ヨハネによる福音書』第5章17節]

3. 神は不変であり、あらゆる被造物は可変である。[というのは、神は、被ることができないがゆえに、滅ぼされたり、変更されたりすることもあり得ない。被造物は、まさにさまざまに被るがゆえに、そのあり様<sup>8</sup>をさまざまに変化させ、最終的にはそれを失う。こうして、神のみが存在と呼ばれ、被造物は存在の陰と呼ばれる。]

### 4. 善という根拠による相違

1. 神はあらゆる秩序と完全性を有するが、被造物がそれらを有するのはただその起源においてのみである。

2. 神は、あらゆる様式であらゆる被造物に仕えるが、被造物は、限られた時間と様式によって自身と特定の他者に仕えるのみである。

3. 神はあらゆる至福の源泉であり、神からの水路なくしては、いかなる被造物もない。

7 コメニウスは、本著作の第四部VI.2.をはじめ、他の多くの著作でこの一節を引いている。

8 ここは、ensやexistentiaとの混同を避けるため、esseを「あり様」と訳した。

[詩篇16:11]

## II. 被造物どうしの相違

### 1. 本質という根拠による相違

1. 存在とは、抽象的であるか具体的であるかだ。[抽象は、人間らしさや白さが白人といったような主体を有した具体的な形相となるように、それ自体を貫通する形相を意味する。]

2. 存在とは、自然的であるか人工的であるかだ。[自然的な存在とは、それ自体の種からそれ自体を通して生み出され、木や動物などのように神によって分け与えられた形相である。人工的な存在とは質料から構成され、テーブルや書物や塔のように、その匠の喜びとなる形相である。前者の場合の制作者は神であり、道具はその内部に含まれた霊であり、後者の場合の制作者は外に広げられた神の道具としての人間である。]

3. 存在とは、普遍的であるか単一的であるかだ。[普遍は「人間」のように多くに共通し、単一は「アベル」のようにひとつの個体である。]

### 2. 統一という根拠による相違

1. 存在は単純であるか複合的であるかだ。[単純な存在は、水、空気、光などのように、ただひとつの質料のみで構成される。複合的な存在は、水と小麦粉からできるパンや、紙と文字からできる書物などのように、異なった自然から生成される。]

2. 存在は全体的であるか部分的であるかだ。[全体的な存在とは、木や人間の身体などのように、何もそれに属さない。部分的な存在とは、枝や手足などのように、何かに属する。]

3. 存在は、同一であるか多様であるかだ。[同一の存在は同一の終極へと連続しており、多様な存在は多様な終極へと連続している。それは、ダビデという少年とダビデという男の間で、その人格を見れば同じであり、数量から見れば同じではないようなものだ<sup>9</sup>。]

### 3. 真理という根拠による相違

1. 存在とは現実であるか理性のうちにあるかだ。[現実的な存在とは、キリストのように、知性の外に実在する。理性的な存在とは、聖クリストフォルスのように、知性のうちに

---

9 『開かれた事柄の扉』第31章17節に同様の記述がある。

のみ実在する。というのは、彫刻されたり描写されたりするようなクリストファーはかつていなかったからである。]<sup>10</sup>

2. 存在は、それ自体によってか、あるいは偶有性によってある。[それ自体による存在とは、火における熱のように、固有の実在を有する。偶有的な存在は、温められた水における熱のように、力や偶然によって実在する。]

3. 存在とは力あるいは能動においてある。[力における存在とは、知能のある少年における学識のように、原因のみが実在する。能動における存在とは、学者における学識のように、すでにその原因の外にある。]

#### 4. 善という根拠による相違

1. 存在とは肯定的であるか否定的であるかだ。[肯定的存在とは、視力や健康などのように、実際に善いものである。否定的存在とは、失明や病気などのように、肯定的であることを欠いていることだ。]

2. 存在とは絶対的であるか各自的であるかだ。[絶対的存在とは、「少年」のように、それ自体としてある。各自的存在とは、「弟子」のように、他の何かのゆえにある。というのは、弟子は「教師」との関係において言及されるからだ。]

3. 存在とは完全であるか不完全であるかだ。[完全な存在とは、あらゆる要件（つまり、偶有性）を備えている。不完全な存在とは、場所、時間、数量などが欠けているがゆえに、それに対立している。]

#### 5. 統一、真理、善の段階という根拠による相違

統一は、普遍的あるいは単一的に創造される。普遍的な統一は、あらゆる人間が人間の自然という根拠によってひとつであるように、同じ自然にあずかって構成される。[これは類による統一と呼ばれる。]

単一的統一は諸部分の結合で構成され、これには3段階がある。

1. 諸部分が自然によって結合されている、つまり具体である場合。木は、枝と他の部分が自然によって結合しているゆえに、ひとつである。

2. 書物のように、技術によって諸部分が結合されている場合。

---

10 クリストフォルス Christophorus は「キリストに捧げられた者」を意味し、危険な時にその名を呼ぶと神に救われると信じられている救難聖人のこと。本著作第三部「偶有性の諸相」でも言及されている。

3. 群れや群衆や堆積など、諸部分が偶然的に集められた場合。[これは集合的統一などと呼ばれる。]

真理には4つの面がある<sup>11</sup>。1. 事柄とそれ自体との一致としての形而上学的側面。この対極はない。2. 本来のあるべき場合における、事柄とそのアイデアの一致としての自然学的側面。退化または歪曲化のいずれかによって生じる場合が、この対極の欠陥である。[そうした欠陥は、人間と天使における歪められた自然やあらゆる誤った事柄のうちにある。] 3. 事柄と精神における諸概念の一致としての論理的側面。この対極が、誤りや偽りの想像である。[銅貨が金貨と見なされる場合、それが真理に対する虚構であるように。] 4. 精神の概念と言語の一致としての倫理的側面。この対極は嘘である。

形而上学的善には3つの面がある。1. 私たちが享受できるように、それ自体のために求められるものであり、それは目的と呼ばれる。[たとえば、生命はそれ自体のために求められる。] 2. 私たちが求め、目的のために用いるものは、手段と呼ばれる。[食物は生命を維持する手段であるがゆえに、私たちは食物を獲得する。] 3. それによって手段が利用に適合させられることが保証されるのが、秩序と呼ばれる。[たとえば、食物の香辛料とその正しい使用である。]

## 6. 比較による偶有性という根拠による相違

1. 場所に関する存在と比較される存在は、上または下、前または後、右または左、近いまたは遠いなどである。

2. 時間に関する存在と比較される存在は、以前、以後または同時である。

3. 数量に関する存在と比較される存在は、均一または不均一である。より大きいまたはより小さい、等しいまたは等しくないなどもそうである<sup>12</sup>。

4. 特質に関する存在と比較される存在は、類似または非類似である。多様であるまたは対立するもそうである。

5. 能動に関する存在と比較される存在は、行為者または道具のいずれかである。[木こりと斧の両方によって木が切られる場合、前者は行為者としてのそれであり、後者は道具としてのそれである。]

6. 受動に関する存在と比較される存在は、強いか弱いかのいずれかである。[前者は克服するには困難で、後者は容易に克服できる。]

11 『開かれた事柄の扉』第14章12節をはじめ、他の著作にも同様の言及がある。

12 『開かれた事柄の扉』第31章18節、『パンソフィア事典』に立ち入った考察が見られる (*De rerum humanarum emendatione consultatio catholica*, Tomus II, p. 823.)。

7. 秩序に関する存在と比較される存在は、多かれ少なかれ整序されている。
8. 使用に関する存在と比較される存在は、手段または目的、記号または記されたもの、尺度または測られたものなどである。
9. 愛に関する存在と比較される存在は、より悪いかより良いか、より悲しいかより幸せかである。

(未完)

#### 参 考 文 献

Comenius, Johannes Amos 1974: *Dílo Jana Amose Komenského*, Sv.18, Praha: Academia.

Comenius, Johannes Amos 1966: *De rerum humanarum emendatione consultatio catholica*, Tomus II, Praha: Academia.

#### 〔付記〕

本稿は、2022年度佛教大学特別研究奨励費による研究成果の一環である。翻訳にあたっては可能な限り検討を加えたつもりだが、思わぬ読み違いもあるかもしれない。ご批評を得て、別の機会に改善を図ってまいりたい。

Abstract

*Prima philosophia* of Johannes Amos Comenius:  
Consideration and Tentative Translation 1

Shinichi SOHMA\*

This paper considers the writing process and bibliography of *Prima philosophia* by the 17th-century Czech thinker Johannes Amos Comenius, and presents a tentative translation of the introduction and the first two parts. Whilst Comenius has been exclusively seen as an educational reformer, his educational idea was one of the products through his philosophical inquiries. This shows that the retroactive consideration to his philosophy is essential to understand his ideas of education as a whole. *Prima philosophia*, which was drafted in the early 1630s and was not known for three centuries, is short, but significant to grasp the process of his metaphysical thinking toward the formation of Pansophia in his later years.

---

\* Professor, Bukkyo University  
Part-time Lecturer, Hiroshima Shudo University